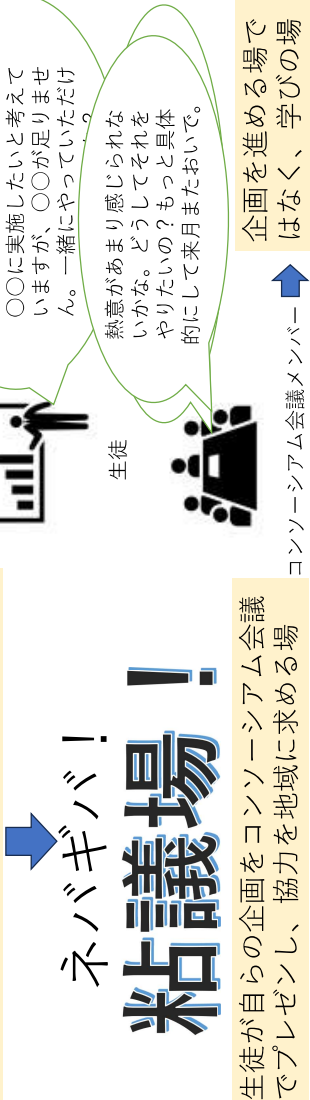


CLASSプロジェクトの成果 Class

【生徒理解に基づく指導の充実】「Student」地域の方々と共に学ぶ機会を通して、互いの存在について理解を深め、尊重し合うことで生徒に自己存在感を醸成させ、共感的な人間関係を育成するとともに、**自己決定の場を与え、自己の可能性を開発するなど、生徒理解に基づく指導の一層の充実を図る。**

【学校と地域の連携・協働の仕組みづくり】「System」大人と子供が協働した、地域の課題を解決していく取組を継続可能なものとするため、**地域と学校をつなぐ「地域コーディネーター」**を確保・育成するなど、**学校と地域の連携・協働する体制を構築**する。

生徒が自分の企画や課題意識から、自ら地域とつながろうとする場の必要性



生徒が自らの企画をコンソーシアム会議でブレゼンし、協力を地域に求める場

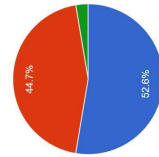
ネバギババ!

粘議場!

CLASSプロジェクトの課題

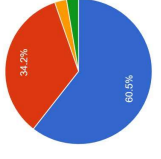
生徒の意識は変わりつつある？
(3年生アンケートより)

総探の活動中、ワクワクすることがあった
38件の回答



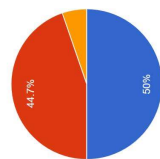
とても楽しかった
楽しかった
あまり楽しかった
全然楽しなかった

総探の活動を通して、達成感や充実感を味わいましたか？
38件の回答



とても味わった
まあまあ味わった
あまり味わってはいない
全く味わってはいない

総探の活動は自分の将来を考えるの参考になると感じますか？
38件の回答



とても思っ
まあまあ思っ
あまり思っ
全く思っ

この結果は鵜呑みにはできない。
生徒のレポート分析が重要。

CLASSプロジェクトの課題

9. 28実施 教員研修より

面談は教員が聞き役になって、とにかく話をさせて、聞き出し

生徒のレポートや発表を見ると、総探で身に付けるべきことが分かっている生徒がいた。
最近の企画では、体験後に教員と面談する時間を確保し、周囲の生徒の主体的な学習経験を一定程度、修正することに成功。

学習指導要領には「生徒の学習経験に配慮すること」という項がある。
(学習指導要領 探究編105)

今のプログラムのスタート段階のハードルが高いのは、何のイメージもないのでは。

探究の目的は、【素晴らしい発表】【報道されるような取り組み】ではなく、実践からコンピテンシーを獲得することが目的。その点さえ把握できているならば、探究の初期段階では課題設定を教員から提示し、徐々に手を放していくスタイルも十分に考えられる。その際には実践的コンテンツの開発が必要となる。

もともとあるものに対するリアクション。
面談増で仕事が増える分、どうするかという大人の探究。

この2点は、研修に参加して下さった地域コーディネーターが発言

元々ある行事である学校祭においては、6の力の自己評価アンケートを取りその分析を実施し共有。レポートについても、探究と同様に項目を細分化中。
面談を増やす、次年度から1学年の総探は2単位だが、定数減により教員は3名減となる問題がある。

以下、作成中の成果物
(発表本編には関係なし)

いつでもご連絡をください。
北海道当別高等学校 古谷知之
Mail : share.future2050@gmail.com

レポート分析：そもそも何を【解き直す】のか？

本校で設定されている6の力について
ルーブリックで学校の活動を自己評価

RS	導敬心	探究力	創造力	協調性	積極性	課題解決力
4点の生徒	12%	22%	17%	19%	14%	19%
3点の生徒	14%	34%	37%	18%	31%	31%
2点の生徒	45%	30%	30%	23%	26%	31%
1点の生徒	29%	14%	16%	41%	29%	20%

導敬心
2点：短所がある自分を好きになれる
3点：自分と違う考えを大事にできる

多くの生徒が2点どまりなので、自分と違う考えを大事にできる。自分と違う考えを大事にできる。多めにできる。多めにできる。多めにできる。

具体的な行動目標の作成

生き方	強しむ力	セルフコントロール	察する
生き方に正解な話や事例を聞き取り	話を聞くのが楽しい	ちゃんと寝て	距離感が近くないと感じること
やりたいことをやりたり		時間を駆使して行動	相手の人格がわかる
		自分で自分の心を満たし	
		自から生き	

・「自分の言葉が採用された！」という肯定感
・生徒集団が理解できる表現が出やすい
・先生から与えられたものではなく、自分たちで作った、という感覚
等の理由から、生徒のレポートから抜粋。

生徒のリアクション集

- ・興味があるものがない...
- ・「何したらいいの？」
- ・「例があるとやりやすくない？」
- ・「どうせ変わる生徒じゃない？」
- ・右上の眺める生徒

今年の2年生で苦戦している実例

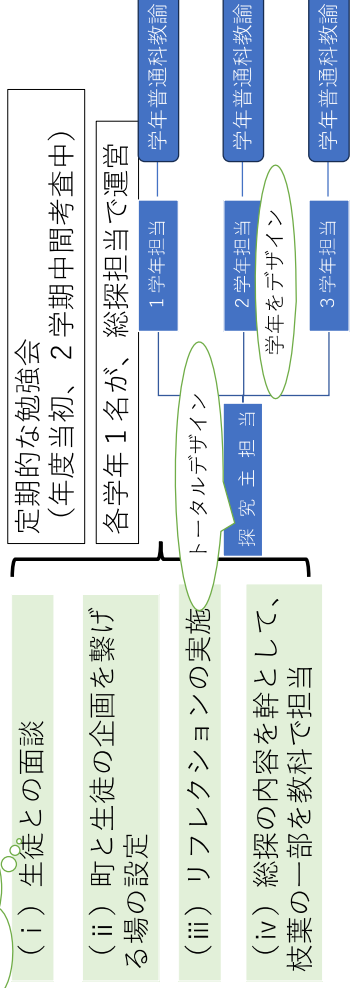
(言われたことは真面目にやっけど、自分で面白い事考えて言われると難しい生徒たち)

古谷は結局、「〇〇おもしろそうじゃね! ?」と言ってしまっています。そこから少しずつ、手を離せばいいかな、と思っています。

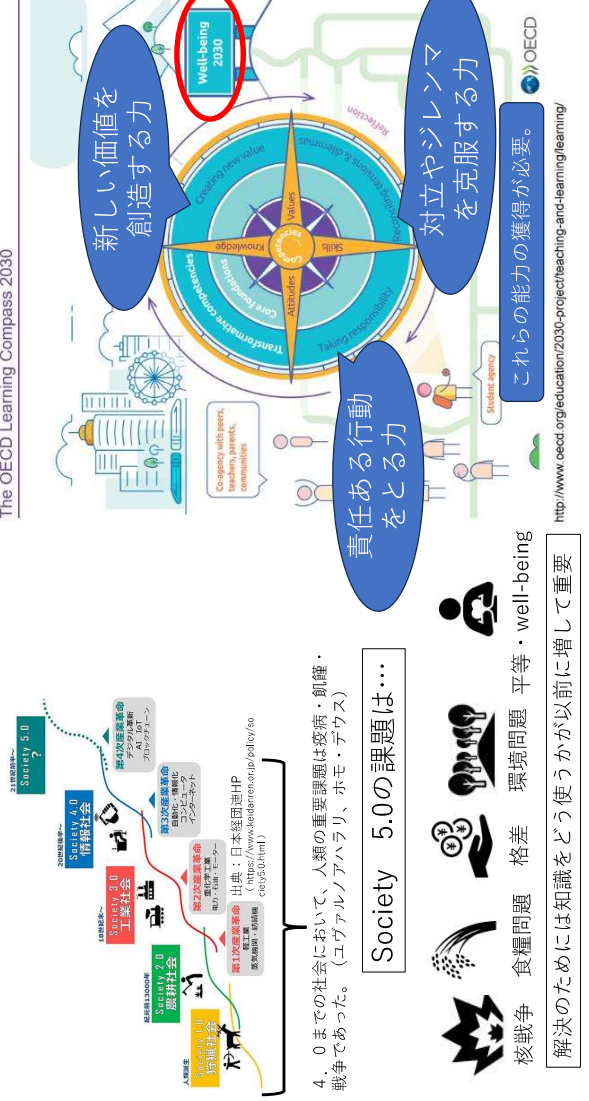
当別高校総探の目的

「この活動から〇〇に気が付いた」「〇〇を学んだ」「〇〇が必要だと分かった」という振り返り、発表になることを目指す。

ゼミのイメージ



時代の変化に伴い、コンピテンシー獲得が重視されている



4. 0までの社会において、人類の重要課題は疫病・飢饉・戦争であった。(ユヴァルノアハラリ、ホモ・デウス)

Society 5.0の課題は...

- 核戦争
 - 食糧問題
 - 格差
 - 環境問題
 - 平等
 - well-being
- 解決のためには知識をどう使うかが以前に増して重要

レポートの悪い例

生成AIも、個人の体験は書けない。

【自分の言葉】で書かれていない。
(講義スライドを写しているだけ、当たり障りのない、抽象論、正しそうなこと)

この講義で学んだことは、インタビューのやり方とポイントを学びました。そして、**■**さんが、このインタビューで大切にしていることは、情報を得るための目的、対話を中心とした事前準備、コミュニケーションと態度と話し方だと言っていました。そして、目的を明確に何のためにこのインタビューをするか、自分の言葉で語れるようにしておくこと、知りたいこと、相手(インタビューを受けてくれる方)を選んだ理由、インタビュー結果を何に使うかを決めておくこと。そして、事前準備をしっかりと準備して相手に興味を持って、質問を考えておく。そして、相手がどんな人が、調べる(経歴や活動など)そして、質問を作る、作ったら、当日の流れを頭に入れておく、そして、話をするのを楽しみに待つことが大事だと書いていました。そして、**■**さんの質問のこつとして、相手の言葉を使う、そうすると質問のほばが広がると、書いていました。これを踏まえて9月8日にあるフィールドワークで活かそうと思います。←

「私」が主語となっていないものは
目的①自分はどうのよう な生き方をしたいか、 という点からも助言対象とする。

生徒のレポートより

生徒の意識は変わりつつある？
(3年生最終レポートより)

自分は元々人と話すのが苦手で、「学校外の人々と上手く話せるかな」とか、「ちゃんと目的を達成できるかな」とか色々不安に思ってしまったけれど、実際に社会人の方々と交流をされていて、初めてしゃべるととても楽しく当別町の山羊小屋の壁に何を描くか等の企画を考えたたりして、その山羊小屋の壁画の下書きが完成して実際に壁に下書きを元にしペンキ等を使って描いていき、それが完成した時は言葉に言い表せないくらい嬉しかったですし、達成感を物凄く感じる事ができました。

将来自分がメジャー開発をする側になるかは分かりませんが、この考えはきつと何処で役立つかと思います。まずは相手にとってのニーズとは？それを考えた上で企画・運営や開発・販売など様々なことに役立ちます。

僕が総合的探求の探求の時間だことは企業さんと協力してイベントをやることの大変さや飾り付け、ティッシュ配り、Instagramなどの工夫など裏でたくさんさんの努力があってイベントが成り立っているとだと思っています。普段参加する側の人から見たら絶対にはたかできない体験ができてとても嬉しいです。最初は自己紹介すら緊張してしまい上手く出来ませんでした。徐々に活動が楽しくなってきました。

僕が総合的探求の探求の時間だことは企業さんと協力してイベントをやることの大変さや飾り付け、ティッシュ配り、Instagramなどの工夫など裏でたくさんさんの努力があってイベントが成り立っているとだと思っています。普段参加する側の人から見たら絶対にはたかできない体験ができてとても嬉しいです。最初は自己紹介すら緊張してしまい上手く出来ませんでした。徐々に活動が楽しくなってきました。

(i) 生徒との面談

目的は
① 企画を進めるため ② 振り返りを深めるため

【実際の運用】

① 企画を進めるための面談(大学の研究室、ゼミのイメージ)
課題・仮説設定、計画立ての総探の授業内、あるいは休み時間、放課後に実施
授業内であれば、1人10分程度。

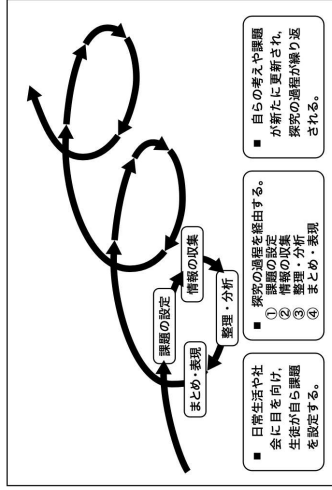
順番に呼ぶ。記録は生徒と共有のドキュメントへ。
「何に興味あるの?」「進み具合は?」「進み具合は?」「どんなことやの?」「どうやるの?」
を中心に対話。

② 振り返りを深めるための面談(カウンセリング、コーチングのイメージ)

レポートを書く前、書く時間において
「どんなことを感じた?」「どう思う?」「どうしてうまくできた?」
「どうしてうまくできなかった?」「何を学んだ?」

生徒は、①日常生活や社会に目を向けた時に湧き上がってくる疑問や関心に基づいて、自ら課題を見付け、②そこにある具体的な問題について情報を収集し、③その情報を整理・分析したり、考えを出し合ったりしながら問題の解決に取り組み、④明らかになった考えや意見などをまとめ・表現し、そこからまた新たな課題を見付け、更なる問題の解決を始めるといった学習活動を発展的に繰り返していく。要するに探究とは、物事の本質を自己との関わりで探り見極めようとする一連の知的営みのことである。

探究における生徒の学習の姿



資料 当 9

令和 5 年度 北海道CLASSプロジェクト実施成果報告書（3 年次）

学校名	北海道当別高等学校
作成日	令和 5 年 1 2 月 1 8 日

1 今年度の検証について

①	検証の項目	Collaboration
	検証の方法	育成すべき資質・能力に関しループリックを作成し自己評価
	検証結果	ループリックには①得点間の違いが読みにくい、②生徒の実態に即した設定であるかが不明、③自己評価が必ずしも高いとは言えない、④新しい取組であるため自己評価が高くなりがちという4点の問題点がある。そのため、 <u>具体的にどのような行動を、目的とすればよいかというリストを作成</u> した。これは生徒のレポートから抜粋し能力別に分けて作成した。

②	検証の項目	Literacy
	検証の方法	各教科に依頼し、探究的な学びを意識した取組の実践を行う
	検証結果	CLASSプロジェクトの推進をとおして、各教科にお願いできそうなことが明らかになった。それらの内容を校内研修で共有し、次年度以降は各教科で「探究」を意識した授業を実践予定。

③	検証の項目	Adult
	検証の方法	コーディネーターを通じて多くの外部人材に各種授業に参加していただいた。 目的が【地域の未来を創る人材を育成する】であるため、現段階では検証が困難である。
	検証結果	教員が行う時とは異なり、緊張感や新鮮さ、発見が多くある授業ができ、それは生徒のレポートや当日の様子からも見て取れた。KJ法や対話などの探究基礎も地域の方にご協力いただくことができたのは効果的であった。

④	検証の項目	Student
	検証の方法	課題の設定を目的とした面談
	検証結果	自らの興味・関心と社会を結び付け、面白いと思える企画を設定できた生徒が想定より少なかった。原因としては教員の面談スキル不足と、生徒自身の興味の幅が非常に狭いこと等が挙げられる。さらに通学時間等におけるスマートフォンの利用時間が長いことも要因の一つと考えられる（SNSなどの広告や動画は、本人の好みによってカスタマイズされ、それにより自己の世界が深まり肯定されるが、それ以外の情報には触れにくくなっている？）。

資料 当 9

⑤	検証の項目	System
	検証の方法	地域と生徒をつなぐプレゼンの場を設定
	検証結果	プレゼンの様子からは、予想以上の成果があったと感じる。生徒が自ら大人たちに対して名刺交換を行ったり、情報を得ようと積極的に助言を求めたりする姿が多く見られたこと、さらに、生徒の呼びかけに応じ、平日の昼休みに打ち合わせに来てくださる地域の方も想定より多くあった。これらは教員が指示したわけではなく、自発的な行動によるものであり、自走及び発展に向け、非常に効果的な取組であったと言える。課題としては、このプレゼンの場を持続可能にしていくことが挙げられる。場を運営し、 <u>プレゼンに耐えうるだけのサポートを生徒に行う教員側のスキル向上が必須</u> である。

2 当事者の声について

生徒	<p>【3学年の最終レポートより抜粋】</p> <p>①自分は元々人と話すのが苦手で、「学校外の人々と上手く話せるかな」とか、「ちゃんと目的を達成できるかな」とか色々不安に思ってしまったけれど、実際に社会人の方々と交流をしていって、初めてしゃべる人とてもとても楽しく当別町の山羊小屋の壁に何を描くか等の企画を考えたりして、その山羊小屋の壁画の下書きが完成して実際に壁に下書きを元にし、ペンキ等を使って描いていき、それが完成した時は言葉に言い表せないぐらい嬉しかったですし、達成感を物凄く感じることができました。</p> <p>②将来自分がメニュー開発をする側になるかは分かりませんが、この考えはきっと何処で役立つと思います。まずは相手にとってのニーズとは？それを考えた上で企画・運営や開発・販売など様々なことに役立ちます。</p> <p>③僕が総合的探究で学んだことは企業さんと協力してイベントをやることの大変さや飾り付け、ティッシュ配り、Instagramなどの工夫など裏でたくさんの方があってイベントが成り立ってるんだなと思いました。普段参加する側の人から見たら絶対にできない体験ができてとても嬉しいです。最初は自己紹介すら緊張してしまい上手く出来ませんでした。が企業の方が明るく接して下さり、徐々に活動が楽しくなっていました。</p> <p>④僕が総合的な探究の時間で気がついたことは積極性や事前の準備などとても大切だなと思いました。その理由は僕たちの班は僕と含めてあまりにやる気がなく、積極性に欠けていて、そのせいで本来やるはずの企画が無くなってしまいました。このことを踏まえて、事前準備の大切さやその物事に対する積極性というのが大切というのが分かりました。</p> <p>⑤反省点は事前準備が全然できなくて迷惑をかけたり時間がないのにも関わらず遊んだり喋ったりしてしまったことを反省しています。でも社会に触れてみてちょっとだけ社会勉強できて大人の人から話を聞いて興味湧いたり調べたりしたのでこれからも社会のことを知るため事業者さんのお話を参考にいろいろ</p>
----	---

資料 当 9

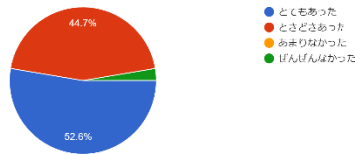
な人からのお話を聞いていきたいと思えます。

⑥僕は、この総合的な探究の時間を振り返って学んだことがいろいろありました。まず、僕たちの担当をしてくれた企業の人たちの話を聞いていると本気でこのプロジェクトに取り組んでいるのが伝わってきました。それを見て自分も本気でやらないと申し訳ないなと思い僕も本気で取り組みました。本気でプロジェクトをしている方たちを見てまずカッコいいなと思えました。

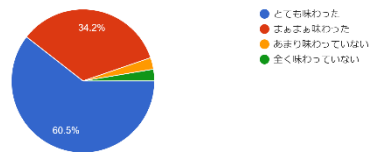
⑦僕は調子に乗りやすく昔から自分の不器用さも相まって何度も失敗を経験しました。毎回後からの後悔をして、自分のその調子に乗りやすい性格が好きではありませんでした。そのせいで非常に打たれ弱く自分が失敗したらどうしよう…だったり余計なことを考えていました。楽しくて周りが見れてない時は自分が怖くて言い出さないようなアイデアもすぐに口出したりしててあの時は調子乗りすぎだと思っていたけど、今考えてみると、僕は自分からアイデアを出すことができるんだなと思えました。僕は自分の調子に乗りやすい性格の悪いところばかりをみていたんだなと気づきこの先もっと自分の性格の良いところを探してもいいかもしれないと感じました。

【3学年の最終アンケートより抜粋】

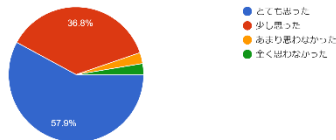
総探の活動中、ワクワクすることがあった
38件の回答



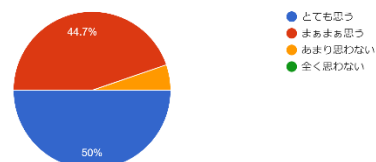
総探の活動を通して、達成感や充実感を味わえましたか？
38件の回答



総探の活動を真面目に取り組んでいる生徒はカッコいいと思えましたか？
38件の回答



総探の活動は自分の将来を考える参考になると感じますか？
38件の回答



このアンケート結果をそのまま受け取ることは適切ではないと考えている。理由は、地域と連携したこのような実践は本校において初めてであり、比較・検討の対象がないこと、また、メタ認知が効果的に働いている場合には、一度大きく評価が下がる傾向があることが報告されていること等による。そのため、この結果が生徒の状態を正確に表しているとは言い難い。読み取れることと言えば、極端にネガティブな印象で取り組んでいた生徒は少ないという程度のことである。

教諭

【9月28日実施の校内研修より】

- ・生徒との面談は、教員が聞き役になる。とにかく生徒に話をさせて、聞き出すことが重要。
- ・生徒のレポートや発表を見ると、総探で身に付けるべきことが分かっていない状況があり、学習（体験）コンテンツの本来の目的から離れたことを

資料 当 9

	<p>気づきとして出している生徒がいた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゼロから課題設定を行うという現在のプログラムはハードルが高いのではないか。学習指導要領（総探編）には「生徒の学習経験に配慮すること」という項目がある。現在の高校1年生は中学1年のときに、コロナ禍に入っていることもあり体験に乏しい。達成や成功の疑似体験がないと、探究活動におけるイメージを持ってないのではないか。 ・探究の目的は、【素晴らしい発表】【報道されるような取り組み】ではなく、実践からコンピテンシーを獲得することが目的。その点さえ把握できているならば、探究の初期段階では課題設定を教員からが提示し、徐々に手を放していくスタイルも十分に考えられる。その際には実践的コンテンツの開発が必要となる。 ・もともとある学校行事をもっと有効活用し、それらに対するリフレクションも充実させることが重要である。また、かつては担任の先生を中心に負担がかかっていた総合学習だが、面談などが増えることにより、全体の授業時数が増加する現実がある。少子化により生徒が減り、教員定数がかつての規則の通り減らされる実態があるが、これは現場の現状にそぐわない。 ・探究的な学習を実施するにあたり、探究に必要な基礎知識・スキルに関する授業は誰が、どのように教えるのかという問題がある。現代において、これらを専門的に教える教員を選抜する必要がある。
<p>地域の方</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・当別高校との連携の中で、当別町商工会との生徒のキャリア教育の充実や町内企業の人材確保に関する連携協定を締結などにつながっており、今後も継続的に連携していくきっかけとなるものだった。 ・当別高校生に対する話をする中で、高校生とコミュニケーションを取るきっかけができ、今まで遠い存在だった当別高校生が身近な存在となり、現在も出来る限りの協力をしていこうと思う。いかに関わるきっかけやつながりをつくるかが重要だし、また反対に、高校からお願いがあるとやりやすい。出来ないものもあるかも知れないが、そんな要望があるのかわかると自分が出来ないことも人をつなぐことが出来るし、自分が出来ることは協力したいと思う。その中で、高校と関わる人が増えると思う。 ・当別町の企業課題としては、働き手の確保が一番の要望である。これまで町外に就職していた子が町内企業に就職してくれる流れが出来ればベストだが、関わりを持った中で、大学や専門学校進学後に当別町で働くという選択肢を持ってくれるだけでも、一歩前進であると思う。1年や2年という短期的な目線ではなく、5年くらいの中長期目線で取り組み続ける中で成果が出ると思う。 ・高校がこれからどう変わるか、は学校が主体になって考えていくことだが、学校だけでは足りない要素を地域が担っていくことによって、より魅力的な高校につながると思う。それこそが学力をベースとした学校ではなく、生きる力を養う学校になり、その中で必要な学びこそが本当の学びである

から、そのような学校に変わっていくことを望む。

- ・北海道医療大学移転問題で、当別町が今後どうなるか、と言った議論が多い中で、今定員割れしている当別高校も、もし閉校になってしまっは当別町が衰退してしまう。当別高校に多くの生徒が入りたいと思ってもらえるチャレンジを多くしていき、その魅力の一つが地域との連携であれば良いので、その接点が様々な取り組みや授業であるように引き続き連携をしていきましょう。
- ・我々は教育者ではないので、どの程度生徒の皆さんに伝えられるのか、何が大切なのかは主観になってしまうけれど、これまでにない機会であることは間違いのないため、関わりを増やしていくべき。社会に出ても、様々な情報に触れるとともに、どれだけの人と関わり、その人の主観を知るか、その中で自分の選択を選んでいくのが重要であるから、今回のプロジェクトでいろいろな機会が生まれているのは、生徒自身にとっても良い機会であったし、また反対に、我々の世代としても今の子たちがどんなことを考えているのか、ということを知る機会となった。
- ・授業で先生と関わる中でも、先生自体の姿勢も重要です。先生が投げやりだと関わる私たちもまた手伝いたって思えなくなってしまいます。やってください、あとのことは知りません、という姿勢ではなくて、お互いに相手が気持ちよくできるようにやれたらいいと思います。その姿勢は先生によって違うと思いますが、地域や協力してくれる人に対して、先生方の姿勢を合わせてもらえると良いかなと思います。また、一緒にやっていく中で、慣れてしまい、当たりまえになってしまうことで、齟齬が生まれるかも知れません。お互いに失礼のない気持ちのいい関係性で継続することも大事だと思います。
- ・これからも生徒たちと接していく中で、地域の私たちがキラキラしていることはもちろん、先生方もキラキラしていることが大切。大人がワクワクしていないのに、子どもたちに夢を持ってとか矛盾してしまうし、子どもは敏感だから感じ取ると思います。私たちがまずはその背中を見せることが大切。
- ・生徒の皆さんの前で話をする機会をいただけて、こちらの方が学ぶことが多かったです。良い機会をありがとうございました。

資料 当 9

3 今年度（令和5年度）の取組について

主な学習活動

1年生				2年生				3年生										
	10分	20分	30分	40分	50分		10分	20分	30分	40分	50分		10分	20分	30分	40分	50分	
4月27日	オリエンテーション	講義	今日のレポート作成 書けない生徒の補助(各担当)			4月14日	実践活動紹介	オリエンテーション・スケジュール				4月14日	総探ガイダンス	オリエンテーション				
	レポートの書き方	講義				4月21日	FW体験スライド	趣旨説明 ()	スライド作成・2A生徒のみ(各担当)			4月20日	※進路行事	進路別ガイダンス				グループ分け アンケート
5月12日	議論①	講義	議論の練習(司会) 生徒の活動補助・見守り			4月27日	FW体験スライド	スライド作成・2A生徒のみ(各担当)				4月21日	※進路行事	講義				
	議論②	議論の練習(司会) 生徒の活動補助・見守り	今日のレポート作成 書けない生徒の補助			5月12日	課題設定	講義	何を課題にするか チェックシートを確認させる (各担当)			4月21日	良い課題・生徒の条件	講義				
5月19日	実践活動紹介	講義				5月19日	校内進路相談会	校内進路相談会				4月21日	グループワーク	各グループで課題・仮説の設定 (全体進行)→(各担当)				
2023/6/2 一5/31	SDGs講話 グループ議論	司会:古谷 講義(北海道大学教授 山中康裕様)				5月26日	課題設定	ここでの課題設定次第で、実践活動内容が固まるため、興味を引き出しつつ、チェックシートを満たせるような補助を行う。(各担当)(個人→グループへ)				4月27日	企業との連携	企業とのコラボがあるグループは日程や条件を取材 場合によってはスラスラマッチングが難しいか??				
6月9日	FW体験談	12年合同、2年生より前年度のFW活動を聞く (司会:古谷 会場設置: 機器準備:)				6月2日	課題設定					5月10日	※進路行事	進学()就職支援プログラム				
6月9日	FW概要/調べ方	FW概要説明() 調べ方について講義				6月9日	FW体験談	12年合同、2年生より前年度のFW活動を聞く (司会:古谷 会場設置: 機器準備:)				5月12日	実践活動	各グループごとに活動				
8月18日	FW/打ち合わせ	FW/打ち合わせの下準備 FW/打ち合わせの下準備 FW/打ち合わせの下準備				6月30日	調べ方	講義				5月16日	※進路行事	進学()就職支援プログラム				
8月24日	FW下調べ交流会	FW下調べ交流会				7月7日	調べ方	先行研究や他の実践例を検討。必ず出典をつけるなど、チェックシートを確認しながら進めさせる(各担当)				5月19日	校内進路相談会	進路行事				
9月1日	FW/事前説明	当日の流れの事務連絡()				9月1日	仮説の立て方	仮説の決定 この日まで				5月26日	実践活動	各グループごとに活動				
9月8日	FW	FWでは必ずその業種が抱えている課題について触れよう ⇒将来的に探究活動は、課題解決のために実践をしてもらう ⇒業界全体・企業や地域の問題への理解を深めることが目的 ⇒2年間続ける探究におけるモチベーションの確保のためにも、興味のあるものにする 生徒の興味・関心から、視野を広げさせ、それらが いざ出る社会の課題や発見などのような機会がある のかを考えさせる。				9月8日	仮説の立て方	仮説の決定 この日まで				6月2日	実践活動	各グループごとに活動				
9月15日	FW/振り返り議論	FW/振り返り議論				10月6日	3年生発表	3年生発表				6月9日	実践活動	各グループごとに活動				
9月22日	FW/振り返り	FW/振り返り				10月13日	見学旅行	見学旅行				6月20日	※進路行事	進学()就職支援プログラム				
9月26日	フィードバック	生徒のレポートからフィードバックコメントを作成 それをもとに生徒と面談し、コメント返却(各担当)				10月20日	見学旅行	見学旅行				6月27日	※進路行事	進学()就職支援プログラム				
10月6日	キャリアパス 事前説明	キャリアパス 事前説明				11月17日	実践活動	外部との打ち合わせや、商品開発に関することなどはここで行う。				6月30日	実践活動	各グループごとに活動				
10月13日	キャリアクエストタイム	ラスト10分はレポート作成時間確保				12月1日	実践活動					7月9日	※進路行事	進学()就職支援プログラム				
10月20日	キャリアパス 事前説明	キャリアクエストタイムで触った事で伝える 課題()を説明し(説明せず)理由や背景があるか				12月8日	実践活動					7月10日	※進路行事	進学()就職支援プログラム				
11月10日	課題の設定	講義	何を課題にするか チェックシートを確認させる (各担当)			12月15日	実践活動					7月25日	※進路行事	進学()就職支援プログラム				
11月17日	課題の設定	何を課題にするか(各担当)				1月19日	スライド作成	講義	スライド構成 必要項目を揃えずように注意(各担当)			8月18日	実践活動の振り返り	各グループごとに活動				
12月1日	仮説の立て方	講義	仮説を立て チェックシートやノートを確認 させながら(各担当)			1月26日	スライド作成	各担当ごとにスライド作成				9月1日	スライド作成と発表	講義				
12月15日	発表とPP	講義	スライド構成 必要項目を揃えずように注意(各担当)			2月2日	スライド作成					9月8日	スライド作成	スライド作成				
1月19日	スライド作成					2月9日	発表会(12年合同)	発表会(12年合同) projectの後継者探しを兼ねて行う。1年生で興味を示す生徒がいれば、引継ぎ。				9月15日	スライド作成	スライド作成				
1月22日	スライド作成	各担当				3月21日	フィードバック	生徒のレポートからフィードバックコメントを作成 それをもとに生徒と面談し、コメント返却(各担当)				9月22日	スライド作成	スライド作成				
2月2日	リハーサル											10月6日	発表会①	ブース発表を検討中				
2月9日	発表会(12年合同)	ブース毎の発表を検討中 projectの後継者探しを兼ねて行う。1年生で興味を示す生徒がいれば、引継ぎ。										10月13日	発表会②	ブース発表を検討中				
3月21日	フィードバック	生徒のレポートからフィードバックコメントを作成 それをもとに生徒と面談し、コメント返却(各担当)										10月20日	フィードバック	生徒のレポートからフィードバックコメントを作成 それをもとに生徒と面談し、コメント返却(各担当)				

月	コンソーシアム会議・関係者打合せ等
4	コーディネーターとの打ち合わせ
5	コーディネーターとの打ち合わせ
6	コーディネーターとの打ち合わせ
7	コーディネーターとの打ち合わせ 地域事業者との打ち合わせ
8	コーディネーターとの打ち合わせ 地域事業者との打ち合わせ
9	コンソーシアム会議
10	コンソーシアム会議

資料 当 9

11	コンソーシアム会議 地域と生徒を繋げるプレゼンの場「ネバギバ！」実施
12	コンソーシアム会議 地域と生徒を繋げるプレゼンの場「ネバギバ！」実施
1	コンソーシアム会議 地域と生徒を繋げるプレゼンの場「ネバギバ！」実施
2	コンソーシアム会議 地域と生徒を繋げるプレゼンの場「ネバギバ！」実施
3	コンソーシアム会議 地域と生徒を繋げるプレゼンの場「ネバギバ！」実施

4 自走可能な体制整備に向けた方策について

- ・コミュニティ・スクールの導入
- ・当別町商工会との連携協定
- ・地域と生徒がつながるプレゼンの場「ネバギバ！」の設定を行い、自走実験中
- ・自由で開かれたコンソーシアム会議の実施

5 圏域の研究指定校等、他校との連携・交流について

- ・北海道大学大学院教授 山中康裕様から探究活動のデザインに関する助言、地域の協力者の紹介、講演
- ・道内各校の取り組みを視察されている北海道大学地球環境科学研究所 神志穂様（学術研究員）からの助言
- ・藻岩高等学校の長井教諭からの助言
- ・帯広三条高校の長岡コーディネーターと情報交換

6 学校独自の取組・工夫

- ①地域と生徒をダイレクトにつなぐプレゼンの場「ネバギバ！」の設定
 - ・生徒が集まった方々に対し、自ら設定した課題についてプレゼンを行う
 - ・生徒だけでは実施できない企画に対し、助言・支援を頂く関係づくりの場
 - ・コンソーシアム会議で実施。参加希望生徒は、申告制
 - ・参加する地域の方にはコーディネーターなどを通して呼びかけを行う
 - ・基本的に地域の方の参加は自由。ネバギバ！の趣旨や哲学の共有は行う
- ②「優れた心理・行動特性表（仮）」の作成
 - ・生徒の実践活動時に、目標となる心理・行動特性表を作成
 - ・作成には3年生のレポートを活用する
 - ・生徒・教員・地域の3者が共有することで指導項目を共有
- ③生徒のレポートに対するフィードバック
 - ・生徒が作成したレポートに対して、教員がフィードバックを行う

資料 当 9

7 その他特記すべき事項

< 3年間のまとめとして >

8 3年間の成果

学校として上手くいかないことが多い3年間であった。ただ、これまでの失敗を糧に次年度以降につながる様々な実践に結び付いたのが最大の成果であるとする。具体的には以下の通り。

①実践した先輩がいるという事

→生徒が目指すべきモデルケースが出来上がった。

②「優れた心理・行動特性表（仮）」の作成

→実際に活動を終えた生徒の言葉から作成することができた。

③教員間の協力体制が構築された

→かなりの負担があるにもかかわらず、前向きに取り組んで頂けた。

④地域との連携難易度が下がった

→積極的にかかわってくださる方が多いという発見。

⑤地域と生徒がダイレクトにつながる場を生み出すことができた

→自走に向けての仕組みづくりができた。

⑥コミュニティ・スクールの設置に向けた準備

⑦当別町商工会との連携協定

9 3年間の課題

地学協働は目的ではなく手段であることから考えると、振り返りが不十分である。特に、「優れた心理・行動特性表（仮）」は、作成したものの、全く効果的に活用及び検証ができていない。また、教員の探究活動に対するスキルアップも必須であると感じる。生徒減少により教員数が削減される中、面談や振り返りなど、探究的な学びにおいて重要な業務は増大することが予想される。従来業務とのバランスをどのように図り、生徒と教諭の双方にとって持続的な学びにしていくかが大きな課題である。